

平成 19 年 8 月 1 日

平城京左京三条一坊四坪（朱雀大路・三条大路・下ツ道）記者発表資料

奈良県立橿原考古学研究所

- ・調査地 奈良市三条大路三丁目
- ・調査原因 国道 308 号線拡幅
- ・調査面積 約 140 m²
- ・調査期間 平成 19 年 7 月 11 日～ 7 月 31 日
- ・調査担当 橿原考古学研究所調査第 1 課 主任研究員 近江俊秀（朱雀大路・三条大路）
嘱託 奥井智子（下ツ道）
- ・検出した主な遺構 朱雀大路東側溝・三条大路北側溝・下ツ道東側溝など

【調査成果と意義】

朱雀大路東側溝と三条大路北側溝の交差点を検出し、その構造が判明

平城京における条坊道路交差点は複数地点で検出されているが、大路どうしの交差点の検出例は、以下の例があるのみ。

東一坊大路と二条条間大路

二条大路と朱雀大路

二条大路と東一坊大路

東一坊大路と六条大路

四条大路と朱雀大路

九条大路と西一坊坊間大路

東一坊坊間大路と三条大路

は橋を検出したもの

構造的特徴は以下のとおり（図参照）

- ・朱雀大路東側溝は、三条大路との交差点部分において幅を減じる。
- ・三条大路北側溝との合流点以南の朱雀大路東側溝には、両岸で護岸のための杭を検出。
- ・朱雀大路東側溝には、橋が架かる。橋の規模は幅 5 m 程度であり、構造は簡易である。
- ・橋の下から多量の土器が出土したが、これは祭祀のためのものか、側溝の管理が橋の下まで行き届かなかったためのものかは不明。

下ツ道東側溝（幅約 2 m、深さ約 1 m）最下層から 7 世紀初頭前後の須恵器の杯蓋が出土。下ツ道敷設時期に関する遺物か？

出土須恵器は、溝底に密着して出土していること。完形であること。他の遺物がほとんど出土していないこと。周辺の調査では、当該期の遺物が出土していないことから、混入の可能性は考えにくく、東

側溝に伴う遺物と考えられる。

よって、下ツ道の敷設時期が7世紀初頭にまで、遡る可能性が浮上した。

下ツ道敷設時期に関する従前の評価

下ツ道の史料上の所見 『日本書紀』壬申の乱（天武元年 672）大伴吹負の軍事活動の中に、「上中下道」として見える。

敷設時期に対する解釈

- 1 7世紀後半説 側溝内から出土する土器から、直線道としての整備時期を7世紀後半とする考え。
- 2 7世紀中頃（斉明朝説） 『日本書紀』白雉四年（653）6月条の、「処々の大道を修治む」の記事を直線道整備の契機とする考え。
- 3 7世紀前半（推古朝説） 『日本書紀』推古二一年（613）11月条の、「難波より京に至るまでに大道を置く」の記事を横大路敷設の記事とし、それと一体的に南北直線道も整備されたとする考え。
- 4 7世紀前半（推古朝説） 『日本書紀』推古二〇年（612）2月条の、「皇太夫人堅塩媛を檜隈大陵に改め葬る。是の日に、軽の術に誅る。」の記事に敷設の契機を求める考え。
- 5 6世紀後半～末説 堺市長曾根遺跡の調査成果から、直線道路網の成立を6世紀後半に求める考え。

敷設時期の上限に対する理解

- 1 下ツ道は五条野丸山古墳を基準として敷設されている可能性が高いことから、五条野丸山古墳の築造時期を遡り得ない。
- 2 推古一六年(608)来朝の隋使が、横大路などの直線道路を利用した形跡がないので、直線道路成立は、それ以降である。

今回、出土した土器は1点のみであるため、厳密な時期決定は困難であるが、少なくとも推古朝には、下ツ道が成立していた可能性が高いことが判明した。このことは、下ツ道と一体的に敷設されたと考えられる、中ツ道・上ツ道・横大路もこの頃の成立であり、飛鳥時代の初期には、奈良盆地に方位に合致した直線道路網が形成されていたと考えられる。



朱雀大路東側溝(北から)



朱雀大路東側溝(南から)



三象大路北側溝(東から)



横断(北から)



横断下遺物出土状況(南から)



横断断面(北西隅)



横断断面(北東隅)



護岸杭断面



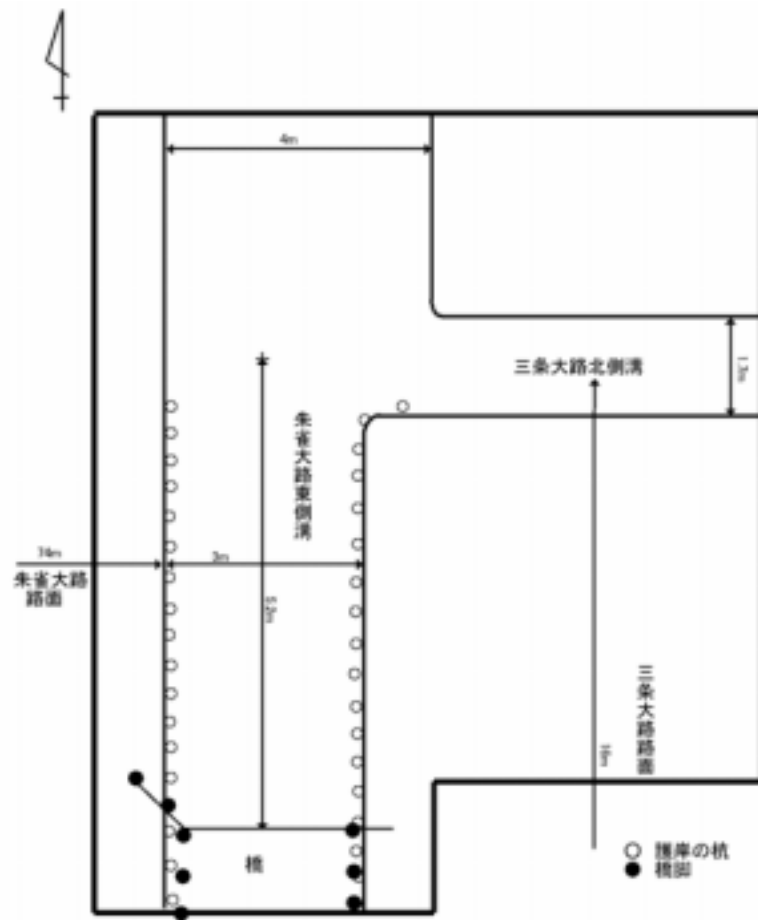
下ツ道東側溝(南東から)



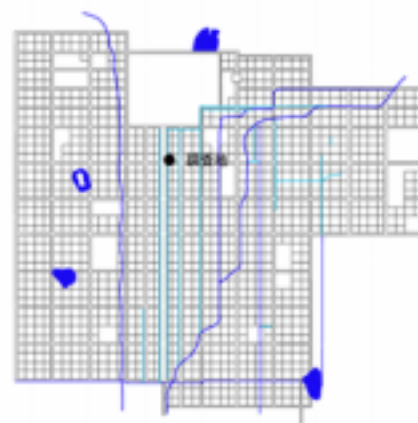
下ツ道東側溝断面(北から)



下ツ道東側溝遺物出土状況(北西から)

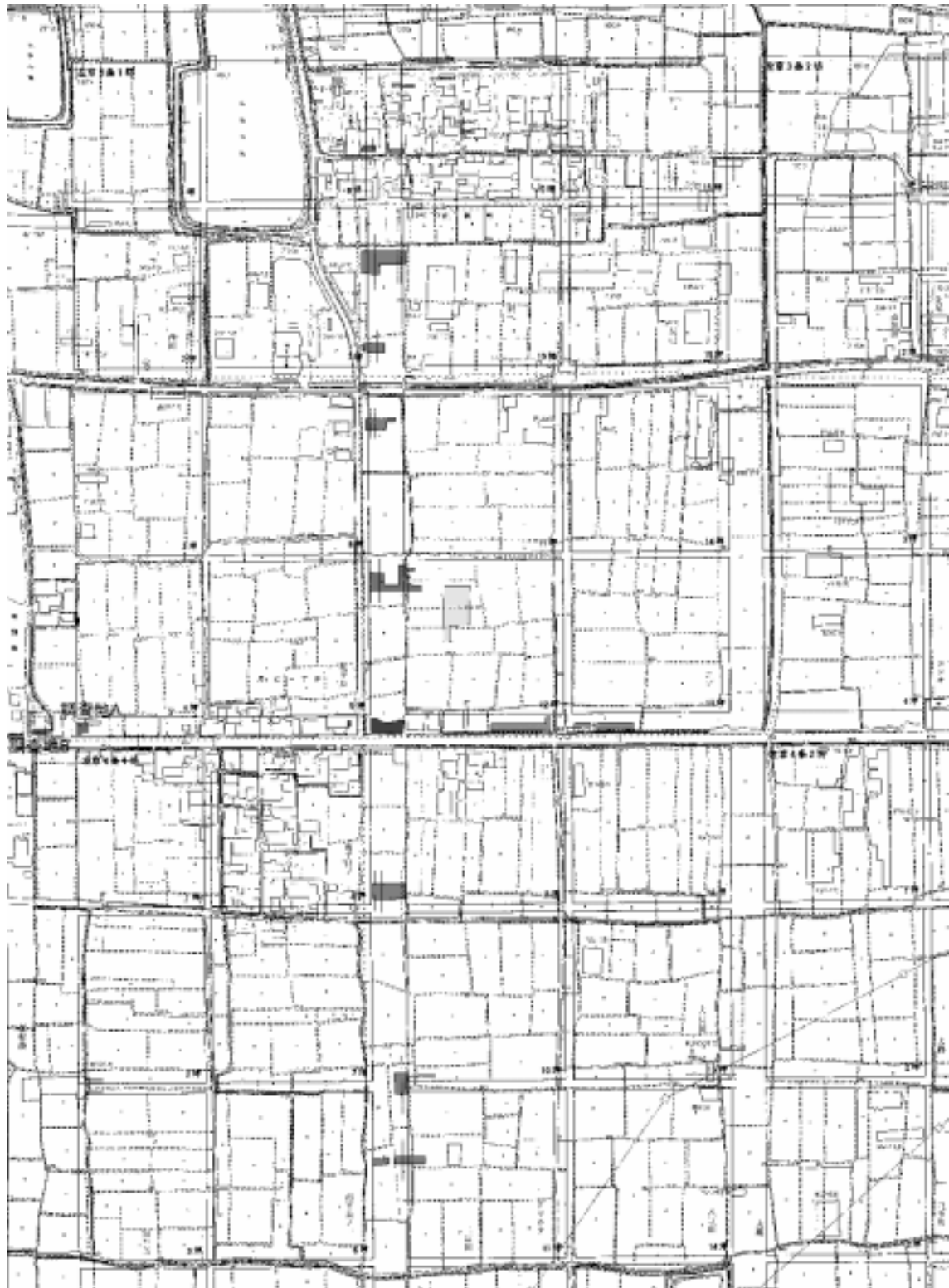


朱雀大路・三条大路交差点模式図



平城京の条坊と調査地

大和の直線古道



調査地と周辺の条坊